巻機山・苗場山

屋野辰也

昭和54年9月22日～24日　山本，屋野，大下

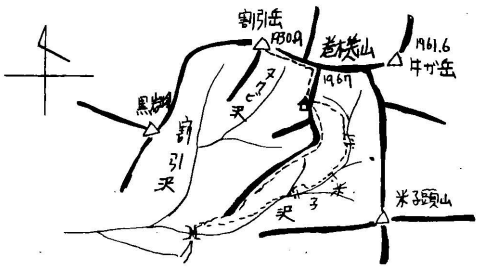
9月22日（晴のち雨）　長岡―六日町―清水（9：10）―米子橋（9：30）―ナメ沢出合（10：20）―奥ノ二俣（13：45）―避難小屋（14：00）―割引岳（15：00）―避難小屋（15：35～16：00）―米子橋（17：50）―清水（18：30）―荻川林道幕営地

長岡にてきたぐにから佐渡2号に乗り換え六日町へ。ここからタクシー（2260円）で清水部落へ入る。工事中の車輌の為，米子橋まで入れず清水より歩く。本日の目的は登川米子沢の遡行である。米子橋よりすぐに沢に入るが，伏流となっており30分程ゴロー歩きとなる。

ナメ沢出合上部の滝は直登は難しく右岸を高巻き，この上のスラブ帯よりワラジに変える。以後奥ノ二俣までは，素晴らしいスラブと滝の連続で飽くことを知らない。上部ゴルジュ帯も滝が連続しているが，いずれもフリクションがよく効き，かつ容易で沢登りを満喫できるところだ。上部ゴルジュ帯を終えたところで，雨が降り出してきた。ラッキーな事に核心部を終えたところだった。小休の後，雨の中を600m程もあるナメの岩盤を登る。沢全体が一枚のナメで浮石やブッシュもなく晴れていれば，走って登れそうなところだ。奥ノ二俣付近より紅葉が始まっており，オオミツバツツジと地衣とのハーモニーで実に美しい。

避難小屋は2階建で10名程入っている。ここに荷物を置いて，巻機山山頂（？）と割引岳（ワレメキ）を登る。残念ながら眺望は楽しめなかった。巻機山はピークが不明確で，最高地点にはなにもなく，むしろ割引岳の方がピークとしては立派である。下山するにはもったいないようなところだが，時間がないのですぐに井戸尾根より清水へ下山する。

清水部落よりタクシー（6650円）にて八木沢より荻川へと林道終点まで入り幕営する。夜半より再び雨となる。



9月23日（雨のち曇）　幕営地（8：00）――和田小屋（8：20）――下ノ芝（9：00）――神楽ヶ峰（10：10）――苗場山（11：15～12：15）赤湯（15：00）

早朝，雨のパラツク中テントの脇を次々に登山者が登っていく。この分では苗場山はさぞかし満員のことだろう。昨日の米子沢は我々だけだったのに！雨の中重い腰を上げ，一路苗場山を目指す。和田小屋までのスキーリストの施設と下芝～上芝付近の山容より推測するに，ここらは春スキーの醍醐味を十分味わえるであろう。和田小屋より先行した連中を次々に抜き，神楽ヶ峰あたりで雨もあがり，やっと苗場山がその特徴ある姿を現わす。苗場山は南北3.5Km，東西3Km余りの湿原で，まさに神の田園という感じだ。

下山は昌次新道を一気に赤湯へと1100mほど下る。赤湯では河原に露天風呂があり，ここで一泊して山旅の汗を流す。大下さんも勇気を出して入りました。

9月24日（曇）　赤湯（5：35）――元橋（8：15）――越後湯沢――長岡――神戸

赤湯より元橋へ山道と林道を3時間近くノンストップで歩く。元橋よりバス（400円）で越後湯沢へ。

山本氏は巻機山の下山中，足の指を骨折したにもかかわらず，快調なペースで下山，そして苗場山をも登るという元気さであった。

金木戸川九郎右衛門谷遡行

星野辰也

10月10日～14日　メンバー　幸内，星野，田中

10月10日（晴）　神岡――池ノ尾発電所（7：35）――広河原（8：55）――打込谷出合（13：45）――B．P（16：40）

神岡よりタクシーで入るが，途中林道がシャットアウトされ広河原まで，立派な林道を1時間半程歩くことになった。広河原より10分程で，右に笠新道を別ける吊橋に出る。

ここから吊橋を渡らず，右岸より金木戸川の遡行を開始する。秋にもかかわらず，昨日までの雨で水量は多く，先が思いやられる。2.5万分の1の地図で右岸に巻き道が記されているが，我々はほぼ沢心を遡行する。しかし圧倒的な水量にしばしば高巻きを強いられる。打込谷出合直前まで徒歩もなく，ルートファインデングは容易である。第1日目は打込谷出合より500m程進んだ左岸にて幕営する。雨の影響で焚火はさえなかった。

10月11日（晴）　起床（6:00）―B・P（7:20）―センズ谷出合（10:25～55）―双六谷出合（14:25～45）―九郎右衛門谷出合（15:10）

抜けるような青空と紅葉，それに足下を流れる激流とに感動と陶酔，それに闘争心とで再び遡行を開始する。今日は朝から徒渉の連続である。巨岩の乗越し，高巻き，へつりと懸垂滝こそなけれども，沢登りの要素が連続して現われ沢登りの醍醐味を満喫する。ポイントはセンズ谷手前のへつりと，キンチゲミのトラバースである。前者は高巻きは絶望的で，我々も最初250m程高巻いたが，壁に行く手を阻まれた。再び下降し，微妙なトラバースを30mして激流を突破する。（ハーケン2本使用。全て回収）後者は泳りで渡れなりこともないが，ちょっと季節はずれだ。左岸のハング気味の壁を水中にスタンスを求めハーケン3本を使用して通過。ラストはワラジを使用したので，水中のスタンスが安定し容易に通過する。ここより沢も大部容易になり，双六谷出合へ着く。蓮華谷の水量は双六谷と同じ程あり，あい変らず多い。しかし金木戸川と比べ，沢自体が非常に容易になり，ペースがあがる。

本日は九郎右衛門谷出合で，豪快な滝音を聞きながらの幕営とする。滝の見物と流木集めに時間を潰す。本日の焚火は盛大であった。

10月12日（晴）　起床（5:00）―B.P（7:00）―黒部五郎乗越（12:15～45）―黒部五郎岳（14:20～40）―黒部五郎乗越（16:00）

昨日の偵察では，出合の滝（30m）の直登には，ボルト，ハーケン，時間それにカッパが必要なことが解った。ルート図では蓮華谷を遡行してから小尾根を越えているが，むしろ滝の左側のルンゼをつめた方が有利な感じがする。しかし，一応ルート図通りに蓮華谷を遡行する。本日より地下袋とワラジのスタイルに変身する。

蓮華谷はいきなりゴルジュで，釜と滝の連続となっている。10m程の2段の滝をザイルを使って登ると沢はS字状に曲り，深いゴルジュになっている。この手前で右岸のルンゼを登る。左右2本あったルンゼの右側を登ったのが間違いで，ルンゼ上部で非常にいやらしい登攀を強いられた。尾根に出てからも15分程尾根を登ると明るく開けた草付きが見えてきた。ここから九郎右衛門谷へ下る。

九郎右衛門谷は，小滝の連続で笠ヶ岳を背にした静かな遡行は，現実の世

界を忘れさせる。人跡はそれを認めることも出来ず，深まりゆく秋に，足下の流れや落葉，岩苔もやがて深い雪の下に埋れ，来春底雪崩れの音が彼らを目覚めさせるまで，深い眠りにつくことだろう。多分，今年中にこの谷を訪ずれる者は，他にはいなりだろうから，我々がそれらと出合う本年最後の人間ということになる。

滝がなくなり，ゆるやかな登りになったころ乗越しへ着く。草原で一服したいところだが，目の前の黒部五郎岳まで散歩に行くことにする。夏の喧噪がまるで嘘のように，山は静かで本来の姿を見せてくれたような感じだ。五郎のカールは不思議な所で，そこを流れる水は音はすれども姿は見えずで，地面の下を流れている。

帰りに五郎小屋へ立ち寄ってみると，冬季小屋が開放されており，中にワンゲルの一個連隊が入っているのにびっくりした。この天気で昼間から小屋の中に入っていたみたいだ。不思議な連中であり，我々が今回の山行で初めて会った人間だ。

10月13日（晴）　起床（4:00）―出発（6:00）―三俣蓮華岳（7:15）―三俣山荘（8:00）―鷲羽岳（8:50）―水晶小屋（10:20）―水晶岳（11:10）―赤牛岳（13:55）―奥黒部ヒュッテ（16:50）

本日は，朝から晩まで縦走に終始する。水晶岳にて単独の女性に会った。烏帽子から来たそうで，これから槍へ行くらしい。元気なものだ。水晶より見下ろす高天原は，紅葉の真盛りだ。赤牛への単調な尾根と，赤牛よりの急な下降とでひっそりとした奥黒部ヒュッテに着く。誰れもいなり河原で盛大な焚火をする。

10月14日（晴）　起床（5:30）―奥黒部ヒュッテ（7:00）―平ノ渡し（8:40）―平ノ小屋（10:45）―黒四ダム（13:20）―大町―帰神

平ノ渡しの時間を調べて来なかったので，少し早めに出発する。冠松おじさんの云うとうり，黒部の紅葉は平ノ小屋あたりが一番美くしい。黒四ダムは人，人‥‥であり，急に現実の世界に戻った。

＜参考文献＞
沢登りルート図集100選　草文社
山と渓谷　431号

明星山・P5墓石稜

星野辰也

10月27日～28日　メンバー　星野，大下

10月27日（晴）　糸魚川 ― 小滝駅（6:15）―南壁下部（7:30～8:00）― 東壁ルンゼ大棚（9:30）― 墓石稜終了点（13:30～14:00）― 明星山（16:00）― B.P（17:30）

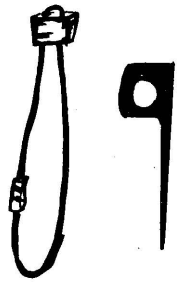
先々週の金木戸川の余韻もまだ醒めぬうちに，再び"きたぐに"に乗る。糸魚川より小滝駅へ。小滝駅にて下車するも，他に岳人はおらず，ノンビリと秋たけなわの林道を小滝川沿いに明星山へ向う。

明星山は全山石炭岩の山で，標高は低いにもかかわらず，その南面は高度な岩登りの場となっている。今回登ったルートは，明星山の入門ルートともいうべきもので，オールフリーでザイルピッチでコンテも含め，8ピッチ程ではあるが，石炭岩という特徴に慣れるまで大部勝手違いの感があった。古いルートにもかかわらず，残置ピトンは少なく（又必要もない），ルートファインデングを要求されるルートではある。明星山にはこの他に，P6東稜あたりが新人向きの感がある。他のルートは非常に高度な技術を要求されるので，十分トレーニングをして挑戦したらよいと思う。明星山の利点は，アプローチの短かさと，低山故に晩秋においても岩登りが楽しめることにあると思う。

10月28日（晴）　B.P ― 小滝駅 ― 糸魚川 ― 帰神

新らしい岩場に来てよく思うことだが，チンネやハッ峰，又は滝谷の何やらルートに見られる人間の痕跡の非常に少ない，比較的容易なルートが多数あることです。縦続登攀としてのスピードクライムをするならまだしも，そうでないならばこれらのルートにもっと目を向けたらと思いつつ，入会1年目の大下さんへの，ささやかなプレゼント山行であった。

30m IV	フェース
40m III	リッジ
50m II	リッジ
15m III	ムーブ
40m II	リッジ
50m I	コンテ
40m II	フェース
40m III	ルンゼ



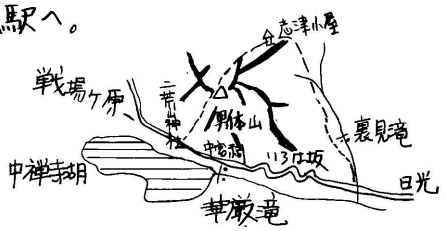
男体山

幸内義孝

10月26日～27日

高いお金を使っての山行だ。奥日光の東照宮を横目で見ながら，裏見滝入口でバスを降りる。10時45分，裏見滝入口11時半，志津峠登山口はわかりにくい。林道12時15分，川を渡る14時．林道15時半，林道から登山道へわかりにくい。途中から道がなくなる。もうこの道は使われていないと思われる。もう廃道のようだ。これからは道なき道を進む。そうするとすぐ近くまで鹿が来る。16時幕営。水を持っていなかったので苦労する。

次の日，7時40分出発。11時10分登山道，男体山頂上11時45分，写真を取って下山。中禅寺湖湖畔までは，2時間程度であった。大満員のバスで日光駅へ。



明神岳東稜～穂高縦走

小林利樹

11月3日～4日　メンバー　神田，川辺，小林，山内

11月3日　前夜，大阪発のちくま3号で一路松本へと向う。上原氏も参加の予定であったが，仕事の都合で参加出来ないので4人のメンバーであった。松本からタクシーで上高地まで入る。

穂高の峰々は上天気のため容姿をためらうことなく我々の目に飛び込んでくる。明神館で朝食を取り，いよいよ明神東稜へと歩を進める。快晴無風の為，夏と同様ものすごく暑い。これが初冬かと思う。りょうたん池まで来ると少しはましである。ここから仰ぎ見る明神東壁はすごい！第一階段はいつのまにか過ぎていて，最後の難所バットレスへと急ぐ。ラクダのコブを過ぎたあたりから積雪が少しついているが，トレースもあり割合気楽に歩む。バットレスの登りは右側の凹角から登るが，荷物があるので後へ引かれるので登りづらい。荷物をかついで登る練習が必要であると感じる。

主峰へは右よりにルートをとると楽である。稜線から見る穂高の山々はいつになく雪が少ないので，少しものたりなさを感じる。さすがにここまでく

ると，疲れがでてきて足が重く感じるが，今日の幕営地前穂までもう一息である。

前穂の頂上でテントを張るけれども，岳沢からの風に悩まされる。一等三角点の頂から仰ぎ見る星はいつになく美しいけれども，明日の天気が気がかりである。なんとか午前中まで持ってくれるとよりのになあと思いつつ寝る。

11月4日　岳沢からの風で寒い。6時にテント場を後にして一路奥穂へと向う。朝が早いので雪が凍っているので，念のために途中からアイゼンをつける。奥穂からが今日の難関である西穂までの稜線歩きである。雪が所々についているのでよけいにイヤな所である。ジャンダルムは思った程難しくなく通過するが，間ノ岳の登りは大きな岩が浮いているので気が抜けない所である。間ノ岳から西穂まで手にとる所にあるけれども，これが結構長い。

西穂頂上から振り返ってみれば，明神からここまできたのだと思いつつ，上高地を目指して長い下りを急いでおりる。途中（15時頃）からポッリポッリと雨が降ってくる。上高地まであと1時間位の所で降ってきたのでまだよかった。稜線で降られるとヤバイ//　バスターミナルにつくと穂高の峰々は霧につつまれていた。

荒川三山～赤石岳縦走

大下澄子

11月2日～4日　メンバー　幸内，星野，大下

初日，田代入口までのタクシーで私，車に酔ってしまい，運転手は必要以上に車を走らせてしまい初めから狂った山行と言えそう。

転付峠までゆっくり富士山を眺め，紅葉を見ながら登り，峠で少し昼寝。そして二軒小屋までおそるおそる下り，そこから千枚岳へ急な登りで，しんどくココアを楽しみに登り，平坦な所でテントを張った。周りは外に出るのに靴がいらない程，落葉でいっぱいでした。

翌日，千枚岳，悪沢岳，中岳とダラダラ歩いて大聖寺平に着き，荷物を置いて小赤石岳，赤石岳をピストンして大聖寺平に戻り，広河原小屋までもうすごい下りを暗くなっても下りてしまい，足を痛めてしまい気分が悪くなった様でした。しかし悪沢岳から見た赤石岳は，非常に彫りが深くて印象的でした。

最後の日は，徒歩にあけくれたという感じで白い足が赤くなり，冷たい中を仕方なく，我慢して歩いて，下りてみると思ったほど疲れもなく，予定通

りの山行を終えてほっとしました。

南アルプス南部

幸内義孝

11月2日　大阪―富士―身延―田代発電所（7：50）―小峠（8：50）―転付峠（11：20）―二軒小屋（12：40）―B.P（2200m付近）（16：00）

一度でいいから峠を越えて山を登りたかった。背風に！　転付峠は，赤，黄，青と美しいの一言であった。O先生がちょっと調子が悪かった。もしH氏と二人だったらK君が調子悪かっただろう。

転付からの富士，千枚岳が美しい。あんな下までおりて！吊橋があったらなあと思った。二軒小屋から急登であった。

11月3日　B.P（6：45）―千枚岳（8：35）―東岳（悪沢岳）（9：45）―荒川小屋（12：00）―大聖寺平（13：05）―赤石岳（14：25）―大聖寺平（15：35）―広河原（17：30）

一昨年は南アルプスで11月にこらしめられた。でも今回は雪もなく，空は青々とし一昨年と比べ，何んと異なるものと思った。悪沢岳，中岳，前岳，小赤石岳それに赤石岳と3000mを歩く楽しさを覚える。

大聖寺平から広河原への下りは，地の底へ下るような思いだった。途中で暗くなるし。

11月4日　広河原（8：10）―林道（12：20）―釜沢（13：20）―飯田―豊橋―帰神

本日は先輩達から聞いていた小渋川を下る。川がヘビのように河原を曲りくねっている。なんとしても川を渡らねば。靴を脱いで，ジャブ　へと。何回も何回もくり返すうち，足が氷のように冷えきった。ああまたかと思い上を見る。赤石もあんなに遠くなってしまった。谷間は，色とりどりの木々が美しさを誇っているようだ！

美しいと思う一方，山の中の又中の村，こんな所で住めるのかとも思う。毎日，晴天に恵まれ，大変良かった山行だった。

恵那山

大川綾子

11月2日～3日　メンバー　国沢，大川

11月2日大阪発（22：20），座席が取れなかったので，いさぎよく通路にやや広く自分のスペースをぶんどり，横になることにした。座席にこだわらず通路の方が楽な場合がある。2時55分，中津川駅に着く。待合室には登山者の先客あり，ここで仮眠する。

5時30分出発，登山入口まではタクシーで行くことになり，乗り合せで5人になった為1人¥600ーと非常に安くついた。6時20分，山々の紅葉はきれいと言う程度のもので，感動するほどではなく，朝の空気の色はオレンジ色に見える。ピリッと肌寒く，身のしまる気分で歩きはじめる。枯葉を踏む音がやたらとひびく中，3組5人の登山者が追いつ追われつ白糸の滝を通って野熊1池へと歩く。少し登ると分れ道になっており，廻り道コース左を選んだため，頂上よりはずれた小屋に着く。後で恵那山頂上2190 mまで行く。遠方に御岳山の煙が見える。より天気である。

昼食はおじ様1人をまじえて，山と人とのふれあいの雰囲気となり，ゆったりと食事をとる。

原生林の中を降りると笹山の大判山に出る。そして右のトラバース道を行き，鳥越峠に出る。笹道の神坂峠を通り富士見台に入る。この展望はすばらしい。ここちより気分となり，食料を全部食べてしまう。そして御岳山には煙が見えず景色はかすんでいる。

14時00分，恵那山を後にガラガラ道と林道を気分悪く下る。季節はずれで，バスは強清水まで入らず，遠々と続く下りはついにヘッドランプを使用。日中の花やいだ紅葉の影もなく，真っ暗の山道はどこか気味悪く，何かとおばけを想像すると逃げ出したくなる心境。

そして，霧が原公会堂の前にて19時45分のバスを待ち，中津川駅21時00分に着く。おじ様と別れて待合室にて仮眠。翌日，朝1時05分の電車に乗る。心おきなくひたすら歩き続け充実した山行でした。

1万円でおつりが来る恵那山です。

奥美濃の山（その1）　大日ヶ岳，高賀山
（1708.9m）（1224.2m）

山本泰彦

5月27日～29日　メンバー　山本（単独）

5月27日（曇）　蛭ヶ野高原スキー場（15:08）―大日岳登山口（15:30）―幕営地（15:50）

5月28日（快晴）　幕営地（6:00）―一服平（1356.3m）（7:10～20）―大日岳（1708.9m）（8:30～55）―鎌ヶ峰（9:25）―水石山（1558.5m）（9:50）―宿宮水場（10:40）―桧峠（10:55）―美濃白鳥駅―美濃相生駅―高畑（14:30）―林道終点（15:35）

白山からの帰途，星野君，田中君と別れ蛭ヶ野高原スキー場で国鉄バスを降る。そのまゝ前へ200m行き，戻るように右折し，最初の角を左折する。牧場のサイロが点在する高原風景を楽しみながら進むと，川島毛織の寮につきあたる。T字路を左折し200m歩くと場違いな印象のホテルがある。ここで右折し農道を山へ向う。廃屋となった別荘の横を通り，坂を登ると山へはいって行く。この入口で幕営する。

翌朝は快晴である。時々ちょっとした登りはあるものの全体にゆったりとした登山道である。右から郡界尾根をあわせて少し行くと一服平で道端に三等三角点がある。ここを過ぎると，残雪のある頂上が樹間から望見できるようになる。尾根は巾広く切開きとなり，傾斜もきわめてゆるいので，山スキーには絶好のコースとなるであろう。頂上手前のピークで北面の展望が開け，一昨日その頂に立った白山が豊富な残雪をまとっているのが印象的である。大日岳頂上には一等三角点標石と大日如来像，それに大阪府大W.V.高道氏の遭難碑がある。遭難碑に刻まれた詩は周囲の風景と融合し，感銘を受けたので全文を引用する。

山は　その美しさを与えてくれた。
我々は　山の美しさを　無邪気な子供のように　賛美し，
神聖な山を　修道士のように　敬慕してきた。
我々が　何ひとつ報酬が　なくても　行ったであろう
あの山こそ　我々の生涯を　生きる宝なのだ。

大日如来像の側に如来の由緒を書いた石碑があった。立山の大日岳を始め，大日の名を冠する山もあるので御参考に引用しておく。

『大日如来は太陽にたとえられ，その知恵と光明は　あらゆる煩悩の暗をのぞき　慈悲の光明は　あらゆるものに救いの手をさしのべ　しかもそ

の知恵と慈悲とは　やすむ時がないという　また長い間　修業をつんで悟り　蓮華蔵世界に住み　大光明を十方にはなち　諸毛孔から　千百億の大小釈迦を化現し　菩薩の心について　説法させているという。」

鎌ヶ峰で休憩していると登山道を狸が走っていく。「奥美濃」という語感そのままの眺めである。

大日岳頂上から水后山までは，両側が切れ落ちた痩尾根を行く。水后山で左へ直角に曲り，2～3のコブを過ぎると桧峠目指して一気に下る。途中でスズコを採り夕食の菜とする。

桧峠から，車と電車を乗り継ぎ，高賀山の北面の登山口である高畑へ向う。小谷通谷にかかる六元橋を渡るとすぐ那比川を渡り，宮ヶ洞谷に沿う雑子林道にはいる。途中，那比本宮に詣でる。「こんな山奥に」と少しりぶかりたくなるほど立派な神社である。林道終点で沢を右岸へ渡り，落葉を褥に一夜の宿とする。

5月29日（快晴）　林道終点（5:30）―御坂峠（6:50）―高賀山（7:15～30）―御坂峠（8:35）―林道（8:35）―高賀神社（8:45～55）―木作（9:40～44）―新岐阜（11:15）―神戸

今日も快晴。白山で天気が悪かったのは，星野君か田中君のどちらかが雨男ではないのかな？昨晩は痛めている左膝が疼いてよく眠れなかった。黄色のプラスチック棒杭（高賀山No.49が林道終点であり，以下順に数字が若くなり，No.1が頂上にある。）に導かれ右岸から左岸へ渡る。二俣では右俣左岸から左俣左岸へ移る。以後，右山側からの涸沢を幾本もあわせるが左岸を忠実に行き，踏をけきながらガレ場を急登すると御坂峠に飛びだす。尾根にはこれまでの踏跡と異なり，高賀部落から立派な登山道が通じている。灌木の中には白ドウダンツツジも交って趣を添えている。背後に瓢ヶ岳に連らなる稜線がみえはじめると昭和52年9月建設の測量櫓のある高賀山頂上である。櫓に登るとなつかしい白山が遠くに見える。頂上には一等三角点，標石と「金光明最勝王経」と刻んだ経塚が立っている。

御坂峠に戻り，南へ御坂谷沿いに下っていく。八百姫の伝説のある岩屋の下で左岸に渡る。坩離取場で右岸に渡り，小憩する。快適な道をどんどん下り送電線，カ石を過ぎると林道に出る。ここは宮下谷に架る西ヶ洞橋から550mの地点であり，付近には谷空木（たにうつぎ）の花が咲き乱れている。

四十体近い「円空仏」や「神像」を収納した宝物殿のある高賀神社に詣でた後，高賀川に沿って下り高賀橋を渡るとバス停「木作」である。わずか4

分待っただけで2時間に1本という路線バスに乗り込む。板取川に沿って下るバスの車窓から谷奥に三角錐の高賀山が毅然とした姿を見せている。板取川流域の村人の信仰を今も集めているのもうなずけるというものである。

奥美濃の山（その2）　能郷白山
（1617.3m）

山本泰彦

9月15日～16日　メンバー　山本，田中

9月15日（雨）　神戸（前夜）―能郷谷登山口（9:20）―白山神社奥社（11:35～12:05）―能郷白山頂上（12:00～20）―能郷谷登山口（14:00）―冠山峠

田中君の友人の都合が悪くなり，2人だけの山行となる。2人だけであれば，大郷谷か白谷を登路に選べばよかったのに悔むが，沢登りの用意をしていないので，一番ポピュラーな能郷谷からのコースをとる。能郷谷が狭まり，標高730m付近で対岸（右岸）に登山口の標識がある。ここから独標928mを経て，前山から派生している郡界尾根に達するまで急登が続く。5年前の3月と12月に湿雪のラッセルに苦しめられたのを思い出す。雨のため50m先もみえない。最近，下刈された歩き易い登山道をひたすら登る。前山から少し下り，斜めの左へ登ると，真新しい白山神社奥社に着く。2，3名が泊れるほどの広さである。少し戻り北東へ笹をかけると測量櫓があり，その下に一等三角点が鎮座している。相変らず視界が悪く何も見えない。早々に往路を引返す。

9月16日（晴）　冠山峠（9:00）―冠山（1256.6m）（9:30～10:10）―冠山峠（10:40）―神戸

終日降り続いた雨もあがり，青空が拡っている。「こんなの登る山じゃないよ。」とひきとめるが，田中君の強い希望で冠山峠から冠山を往復することになる。

さっそうとしたアルピニストスタイルの一団を，ジーパン，作業ズボンスタイルの我々がすいすい追い越して行くのは何だか悪りことをしているようで少々気がひける。峠から約30分で頂上に立つ。奥美濃の名山といわれるだけあって展望は秀れている。能郷白山，荒島岳，姥ヶ岳，金草岳，釈迦嶺等十指に余る山々を指呼できる。トマトジュースで乾杯して，登山者が多くなった頂上をあとにする。田代尾根の頭付近で蝮に出合う。他の登山者の迷惑になるので成仏していただく。

宮崎国体（山岳競技・成年女子の部）に参加して

萩本維都子

第34回国民体育大会山岳競技は，宮崎県奥日向山系を舞台に行なわれ，成年女子の部は全国の地区予選を通過した15チームで争われ，女の熾烈な戦いでありました。

5月の県内予選をスタートに，国体へ向けてのトレーニングが開始されましたが，近畿予選をパスする事が第一の関門でした。7月14・15日の予定が8月18・19日に延期され，夏合宿を断念するには選手3人共に複雑な思いでした。それゆえに勝って帰りたい。国体出場権を手にしないではやりきれない気持ちがそれぞれの胸にあったろうと思います。しかし他県チームの体力には到底及ばず苦しい戦いでした。登攀において逆点出来たのは本当に幸いだったと思います。やっとの思いで2位にすべり込み，それからの2ヶ月間，宮崎国体に向って体力トレーニング，踏査の勉強，登攀のチームプレー，計画書の作成等に全力を傾けました。

10月12日（金）　神戸――日向港

さあ出発だ。これから9日間神戸を留守にする。長いなあ。Mr.神田がもなかを持って見送りに来てくれた。有難いと思う。「まあとにかく頑張ってくるわ」という軽い気持ちで出発する。これが大きなまちがいだったかも…?

10月13日（土）　日向港――延岡――高千穂――五ヶ瀬町

14時間も船に乗りやっと日向港に着く。バス，国鉄を乗り継ぎ今日と明日の宿泊地である五ヶ瀬町に4時頃到着。宿は奈良県チームと同じだ。夜は町を上げての歓迎会があり，そば焼酎とジャンボやまめの塩焼きには感激しました。

10月14日（日）　五ヶ瀬町にて開始式

鞍岡祇園神社に集合し，昼食後，開始式会場である鞍岡小学校までパレードする。道中，町の人達のあたたかい歓迎を受けながら……。兵庫県のユニホームはミニスカートで，いかに私でも人前で着て歩くなんて，勇気のいる事でした。

10月15日（月） 縦走競技　五ヶ瀬町波帰 ― 白岩山（1646 m）― 山小屋 ― 扇山 ― 椎葉村

いよいよ今日から競技開始だ。5時、真暗の中波帰公民館に集合。白岩山登山口までサブ行動（荷物は輸送される）、ここから白岩山を経て、山小屋まで体力審査区間、すなわちタイムレースとなる。（担荷重量は全体で55 kg） この間、一ケ所読図ポイントがあった。

審査区間と無審査区間はハッキリ分かれており、審査区間に焦点をあわせて行くのが勝利への道だが、そのためには第一に基礎体力が必要であり、その上に立っての縦走であり、登攀であり、踏査であるように、全ての競技には制限タイムと担荷重量があり、かなりきついものだった。

椎葉村に着いから、宿泊地の椎葉小学校までパレードする。ここでテントの張り方、石油コンロの使い方の審査を受けた。テントは家型が指定だった。しかし、なんと兵庫県のテントのなさけない事！というより他県テントのすばらしい事！ どの県も早く立てるための工夫をこらし、国体のために特別注文した県もあった程。力の入れ方が違う。ジュラフの中で、ため息まじりに思う。これでは到底勝てそうにないや。

10月16日（火） 踏査競技　椎葉村 ― 竹原 ― 天包山 ― 高塚稲荷 ― 村所

本格的な踏査競技は初めてなので、少なからず興味を持って望みましたが、またしても残敗。竹原までバスで行き、各チーム共出発前に競技用地図（25000分の1）、行動記録書を配付される。確認定点が10ヶ所、設問が4ヶ所ある。もちろん制限タイムもあり、休憩を取りながら問題を解くなんて不可能に近く、ほとんど歩きながら一人がコンパスを見、一人がメモを取るという具合だ。天包山の登りがきつく時間を取り、高塚稲荷に着いた時には4時間が経過していた。あと30分しかない。おじさんに聞いてみると、村所小学校まで50分はかかるとのこと。死にもの狂いで走った走った。制限時間3分前にスベリ込みセーフ。監督の石谷さんの顔色はまっ青でした。悪いなあ。今日のテント地は男子選手と同じだったので、久しぶりに酒盛りする。

10月17日（水） 登攀競技　鉱山谷

台風20号の影響で昨夜半からザザ降り。昨夜、審査員の方からの話では雨天決行。その場合、トップにも確保ロープがつけられるが、滑った時は失

格。セカンド，サードのスリップは減点対照になる。これをきいて胃が悪くなった。とにかく明日はもっと雨が降るだろうけれど，スリップしない事だけを考えた。いよいよ本番。カッパを着て，待機所から見ていると，3級程度の岩にはとても見えない。ホールドも少なそうだし，何よりもヌルッと光っている。1ピッチ目，かろうじて登り，確保してセカンドが来るのを待った。サードが来て，今度はトップで登っていった。サードの私はカラビナを回収しないで登ってしまい，大中に減点。懸垂下降は肩がらみ。すべって足の突っ張りが効かない。泣きそうだった。タイムだけなら神奈川，東京に続いて3位だったが，その他のミスが多く，全体では6位だった。それでも私達にとっては今までの中で一番良い成績だった。

10月18日（木） 縦走競技　上米良小学校 ― 槙之口 ― カの泉 ― 恵の泉 ― 山小屋 ― 市房山

朝からかなりの雨。橋が流されたので今日の競技は中止という情報が流れたが，仮設の橋を渡って2時間程おくれて競技が開始された。この橋も私達が渡った後，すぐ流されてしまった。

槙之口から市房山まで標高差1400m，これを4時間で登れという。山小屋から頂上までがタイムレース，山小屋までは救急法の審査があった。今日は3人のペースがあっているので制限タイムは恐くなかった。うれしいなあ。市房山山頂で歩荷用の砂をおろし，もと来た道を下山する。帰りは和気あいあいと下った。

10月19日（金） 西米良中学校にて表彰式

小雨のパラつく中，中学校の校庭で表彰式が行なわれました。寒くて寒くて，ミニスカートの私達には「忍」の一文字でした。私達の順位は総合でやっと一ケタの9位にすべり込むことが出来，ちょっと信じられない気持でした。成年男子の部でも開催県の宮崎を除いては神奈川，栃木などの関東勢が圧倒的に強く，来年の栃の葉国体はさらに苛烈な戦いになる事と思います。

各県の力の入れ方，取り組み方には兵庫県の及ぶ限りではなく，参加する国体から，勝つ為の国体へ大きく変ろうとしています。それゆえに選手自身の気持ちの持ち方が大切で，国体に全力投球出来ないなら，初めから参加しない方が良いのであって，中途半端な姿勢が一番良くない事を痛感しました。しかし，宮崎国体に参加して私自身，大変プラスになりましたし，色々な同じように山の好な人々と知り合うことが出来たのは大きな喜びです。また，

どこかの山々で再び会えるその日まで，さようなら・元気でいて下さい。

（参加メンバー　監督・石谷康雄
選手・萩本維都子，田尾由起子，山本貴子）

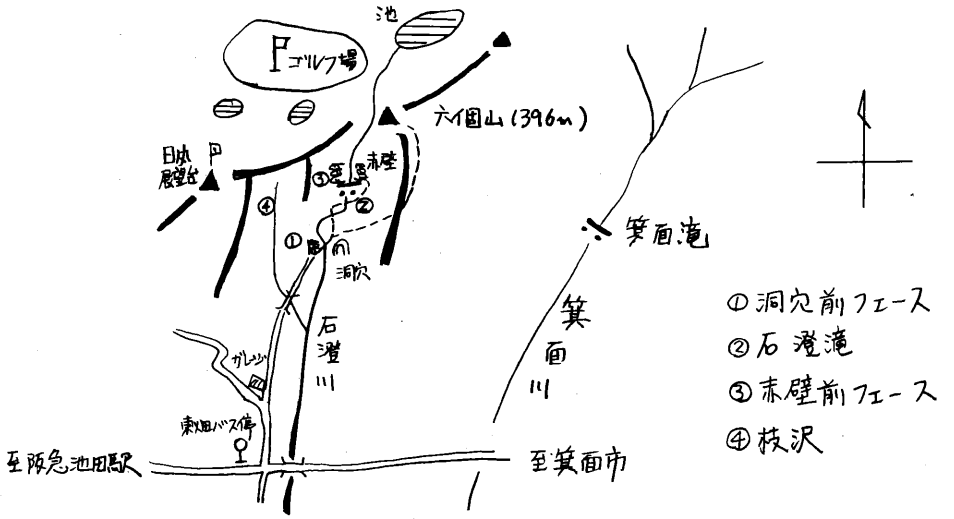
石澄の岩場

神田章吉

〈概　観〉

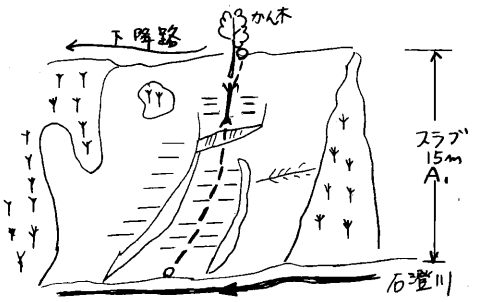
大阪府池田市の北部に位置する五月山の南側を流れる石澄川中流にある岩場で，スケールは小さいが，訪れる人も少なく，静かな雰囲気の中でクライムが楽しめる。岩質は，堅い水成岩であるが，少々脆い。

交通機関としては，阪急池田駅より，東畑行きのバスに乗り，東畑のバス停より坂道を北に上がっていくと，道路が急カーブするところに入口がある。



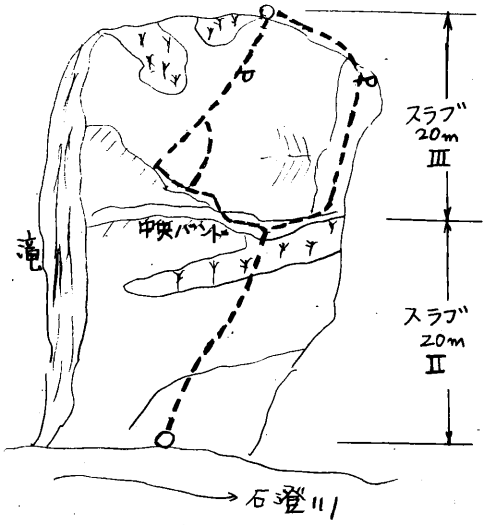
①洞穴前フェース（15m，A1）

沢を渡り，ハーケン，ボルトに導かれツルツルのハング気味のスラブを人工で直上する．かん木下のクラックは崩壊が激しくピンが必要かも？そこを乗越すとかん木の根にハーケンがあり，フリーヌは人工で乗越し終了点。



② 石澄滝（40m，Ⅲ）

1P目はどこでも登れるスラブ，水がしたたっている時は注意。2P目，左ルート，右ルートともスラブでフリクションクライミング。左ルートはハーケン（あまり効いていない）の下がぬれている時はいやらしい。



③ 赤壁前フェース

Aルート（Ⅲ～Ⅳ）

㊧ かぶり気味のフェースを直上後，右へトラバース

㊨ 右斜上後，ハーケンをたより左へトラバース。

学大バンドよりカンテを右にまわりこみ斜上する。浮石に注意。

Bルート（Ⅲ～Ⅳ）

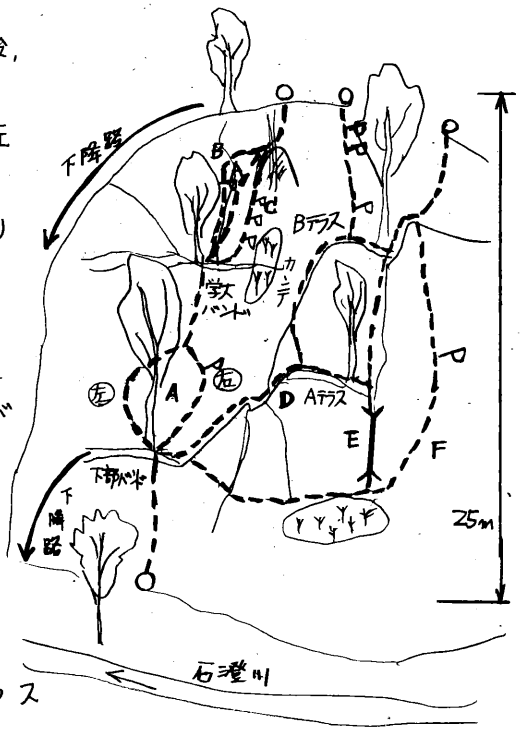
学大バンドよりカンテの左側のフェースをいく。ハーケンは錆ているが2本。少々かぶってる。

Cルート（A_1）

学大バンドの手前より右に入りハーケンボルトに導かれて人工で直上。

Dルート（Ⅲ～Ⅳ）

下部バンドより右斜上する。Bテラスより上部はバランスクライミング。



Eルート（Ⅲ）

下部バンドを右へトラバースののち，クラックをブッシュを頼りに登る。

Fルート（Ⅲ+）

浮石に注意。最後の乗越しはホールドがなく，ブッシュを頼りに登る。

④ 枝沢

小さな滝が4～5個でてくる。飯場のようなものも建っており，又，上のゴルフ場からの汚水で，少々興ざめとりったところ。あまりお勧め品ではないが，一度つめてみて下さい。

<石澄川上部>

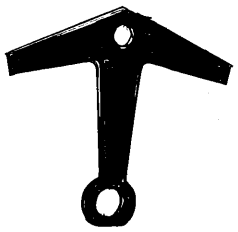
石澄滝より，小さな滝が4～5個出てくる。途中，大きな釜などあり，夏にはかっこうの泳ぎ場を提供してくれるはずであるが，にくきゴルフ場めが，汚水を流すため，泳ぐことに二の足をふむ。（くそ～）
最後の滝は，傾斜度45°，10m。左側をアンダーホールドでへっりながら登る。（ハーケン1本アリ）　又，右側の岩場をのぼることもできる。（4m程度）　そこをつめて，東に向って登っていけば五月山最高峰の六個山である。尾根通しに南に下れば，ほら穴のところに出る。
（ゴルフ場経由で山上道路に出ることもできる。）

―新・但馬の山々―　について

年が明け，今の冬が雪に恵まれた年ならば部屋のすみに追いやられている山スキーを引っ張り出してワックスをかけ，そして仲間とともに夜汽車に乗ろう。

一つ一つのルートを再トレースして，先人の足跡を自分の体で感じ，ある者はおのれの技術に満足し又あるものはそれに落胆するかも知れぬ。

1回に2ルート行ければ乾杯だ！　いや1ルートでも乾杯しよう。A君にB君はOKだ。C氏はスキー技術がどうも。なにはともあれ堅苦しく感えず気長にやることだ。



新・但馬の山々

弘の尾・青ケ丸・瀞川山

山木　泰彦

3月31日～4月1日，メンバー：山本，広澤，大川

3月31日（曇のち晴）　宝塚（前夜 22:25）――八鹿（2:00～7:25）――和田（8:20）――佐坊（8:35）――牧場（9:20～9:55）――尾根（10:40～10:55）――仏の尾（12:35～13:20）――1144m独標（13:53）――1153m独標（14:03～14:12）――青ケ丸（14:55～15:25）――高巻き開始（17:00）――尾根（17:30～17:40）――二俣（18:40）

心配していた天気も、バスが鉢伏口を過ぎる頃には、朝の天気図通り、雨もあがり、遠望がきくようになる。和田でバスを降り、バス停前のタクシーで佐坊へ向う。（1930円）　佐坊から山奥（西へ）へ林道をたどる。民家の前で左右に道が別れるが，ここは左手の道をとる。道端には"蕗のトウ"が芽を吹き、早春を告げている。鞍部状の所を過ぎると，林道は尾根の南側を行くようになり，展望も開け　南側に赤倉山、行手には青ケ丸、仏の尾が見えてくる。残雪は谷筋と県境稜線に認められる程度で落胆する。左手の谷に残雪と見間違うほど，長く水量豊かな滝が懸っている。これが"八反の滝"であろう。ほどなく林道は牧場へ入る。牧場といっても山の南斜面のゆるくなった芝地といった感じで簡単な柵でそれと知れる程度のものである。眺望が素晴しいので大休止とする。牧場の下で水を汲み、なおも林道をたどる。816.5m三角点と仏の尾との鞍部の約50m手前で左手に小径が別れているのでこれに入る。最初は右山腹を行くが，松の植林帯で尾根に出る。少し登ると赤倉山の背後に氷ノ山が見える。この頃から青空が拡り、のびやかな気分となる。ここからだと大幹線林道も見えないので，鉢伏山も立派な山容となり，野間峠を隔てて瀞川山と対峙している。行手には仏の尾が三角錐をみせているが，読図の感じでは頂上は少しその先であろう。尾根の左手には保塁岩を大きくしたような岩も見える。径はここでなくなったが，伐採後日も浅いせいか歩き易い。しかし、すぐ藪に入る。と同時に尾根の右手斜面に残雪があらわれ，これを利用して歩く。しかし，ワカンをつけても腐った雪に潜るばかりでピッチがあがらない。さらに悪いことには、雪の下は根曲竹でこのためワカンが滑り、"二歩前進一歩後退"を繰返す。竹を掴み、雑木の根元を足掛りにして、雪を騙し騙し急登を続ける。頭上が青くなり、伸び出

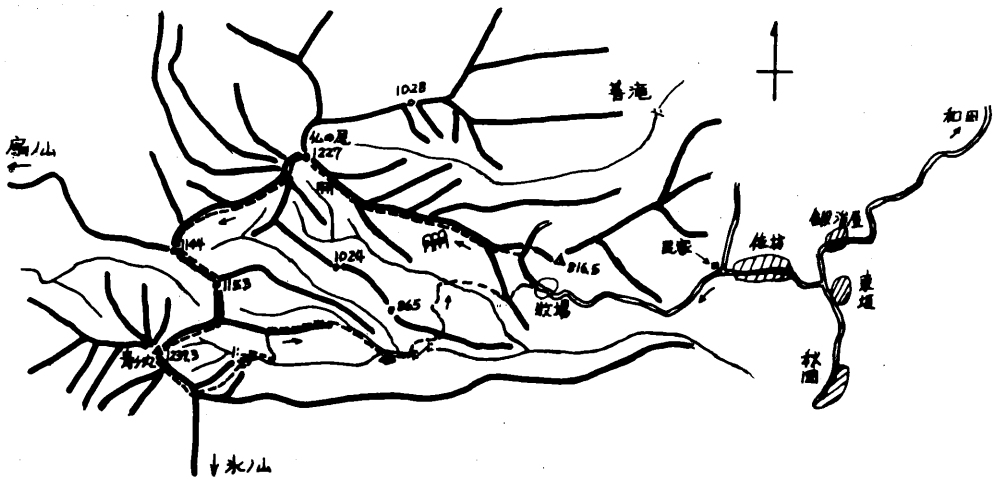
した所は予想通り頂上でなく，ここからゆるくなった尾根を少し藪漕ぎして最高点（1227m）に達する。仏の尾は円頂の南峰と北峰に別れ、北峰の方がやゝ高い。頂上付近には伐採を免れたブナの巨木があり趣を添えている。この付近から南峰にかけて竹が雪で押さえられているため、眺望が良くきく。鞍部付近の大木に西宮甲山労山の頂上標識が5mも頭上に打たれている。南峰を過ぎると雪をまとった青ケ丸がその全容をみせる。ここで120度右手に折れ急に下る。次のコブで右手に直角に折れる。1144m独標で県境尾根と出会い左手に直角に折れる。このあたりはブナの林で雪も締っており、歩き易い。1153m独標で右に120度折れ、藪の半分出た尾根を行く。右手の扇ノ山に励まされ、青ケ丸へ急登する。頂上は細長く、鳥取県側は根曲り竹が起きているため展望皆無。航空標識が樹上にあり、三角点を探すものの10cmの積雪に妨げられ、発見できず心残りとなる。頂上を南西にたどり、県境尾根と別れ秋岡部落へ伸びた支尾根を辿りかけると、先輩2人は「谷を下ろう。」とおっしゃる。僕は未知の谷に下るのは嫌だし、根曲竹との対話を交したかったので尾根を下ることを主張したが，美女は藪がお好きでない様子。やむなく50度くらいの急斜面の雪の詰った谷を下る。高度にして200mも下ったろうか、本流との合流点で30mの滝が現れた。左岸にはデブリがあり、右岸の草付を雑木を頼りに下る。ここから沢は小滝を懸けているもののおだやかとなる。渡渉を繰返し下って行く。先輩達はあまりのんびりしているので伺ってみると、「沢を下るのは初めてよ。」と仰せられる。そのお言葉は尾根と別れる前に伺いたかったと思っても，いまさら仕方無し。このペースでは，この沢を下るのは時間がかかりすぎるので、少し悪場がでてきたのを機会に左岸を高巻きして、1153m独標の200m南の県境尾根から東へ派生している尾根に登り、これを下る。獣道なのか割合歩き易い。突然，左斜面に黒いものが見え、熊かと思い、身構えてコールをかけるも動かない。近付いてみると、古株の部分が雪融けて黒くみえたのである。近視の者だけでパーティを組むのは考えものである。尾根の末端で雪の詰った沢を下り、植林に出る。ここからゆるやかな沢を下り、右手からの本流の沢もあわせた二俣で幕営する。テントの外で先輩達の着換えが済むのをラッセルで濡れた身体を震わしながら待つ。満天の星は翌日の天気を約束しているようである。

4月1日（晴のち曇）　二俣（7:10）——牧場（7:50～8:00）——佐坊（8:35～8:40）——茅野（かやの）（9:25）——牧場（10:15～10:30）——野間峠（11:25～11:35）——瀞川山（12:35～13:20）——瀞川橋（15:55）——村岡

(16:10 ～ 16;40)――八鹿――姫路――神戸

二俣から100mも下ると、沢は巾広い滑滝となる。ここで右岸に取水口をみつける。取水口から200mも行くと、右手下に沢が落差40mほどの滝となっていて、その轟音はあたりを支配している。取水路沿いの径を行く。赤い鉄製の水路橋を渡り、ワサビ田を過ぎ、山腹をゆるやかにまくと、往路に通った牧場下へ出る。青ケ丸を"リトル立山"と呼称した人があるが、ここからの眺めはまさにその通りである。牧場で一本たて佐坊へ下る。墓地には山桜、庭には桃が咲き、沈丁花の香りが漂うのどかな山里である。近道して県道へ出て茅野部落から野間峠への径に入る。地図の破線図通り、谷沿いの道を行く。丸木橋を渡った所から右手の尾根に取付き、小舎の横を通って牧場にでる。ここからは仏の尾、青ケ丸が見え、一本たてるには良い所である。牧場に入ると径ははっきりしなくなるが、奥にある二本杉までいけば、径がでてきて谷沿いに少し登る。右手の植林が切れた所で径はその上端を行き、935m三角点から派生している尾根に取付く。四年前に来た時は、相当荒れていたため、ナタで木を切り整備しておいた。その後手入する者があるのか、歩き易くなっている。雑木越しに眺望もあり、のんびりと登る。野間峠は何もない峠である。ここから鉢北スキー場と古生沼がみえる。雪は谷筋にわずかに残っているだけであり、リフトの音がうっろに響いている。瀞川山へは林道もあるが尾根上の径を行く。林道ができてから歩く人も少いのか、1,2ケ所はっきりしない個所もある。しかし、笹の香を聞き、唐松と対話のかわせる気持の良い径である。左手には陣鉢山、青ケ丸、仏の尾、右手には妙見山、蘇武岳、三川山と眺望があまり素晴しいので、立止っている方が長い。一旦、径は林道を横切り、良い径となり、瀞川山頂上へ着く。一次基準点測量用櫓が切り倒されている。点名「高尾」二等三角点である。氷ノ山東尾根のうえに頭をだしているのは須留ケ峰である。仏の尾の肩に扇ノ山もみえている。頂上から北方へ下ると、径は雪の中に消える。こんな所に残雪があるとは!! 勘を働せて下ると径が現れ、すぐ雪の中に消える。標識のある所で径は直角に折れ、植林の中にはいっているようだ。「この植林を横切って藪を下れば-----」とも思うが,「藪のお嫌いな美女達がいることだし。」というおもいやりの方が強く、大幹線林道を村岡へ下ることにする。適当に近道をし、長い長い林道をたどり、湯舟川にかかる瀞川橋へ降り着き、山旅を終える。

仏の尾・青ケ丸 概念図



須留ケ峰（するがみね）（1053.5 m）

山本　泰彦

4月7日，メンバー：山本（単独）

4月7日（快晴）　宝塚（前夜22：25）——八鹿（2：00～7：30）——田淵（8：40～8：45）——登山口（8：50）——左支尾根に取付く（9：45）——主尾根（10：30）——須留ケ峰（11：33～12：10）——987m独標（13：05）——径と出会う（13：35）——林道（13：57）——ズリ捨て用軌道（14：25～14：35）——局前橋（14：50）——明神電車乗場（15：10～16：08）——神子畑（16：45～17：27）——新井（17：45～18：30）——姫路（20：10）——神戸

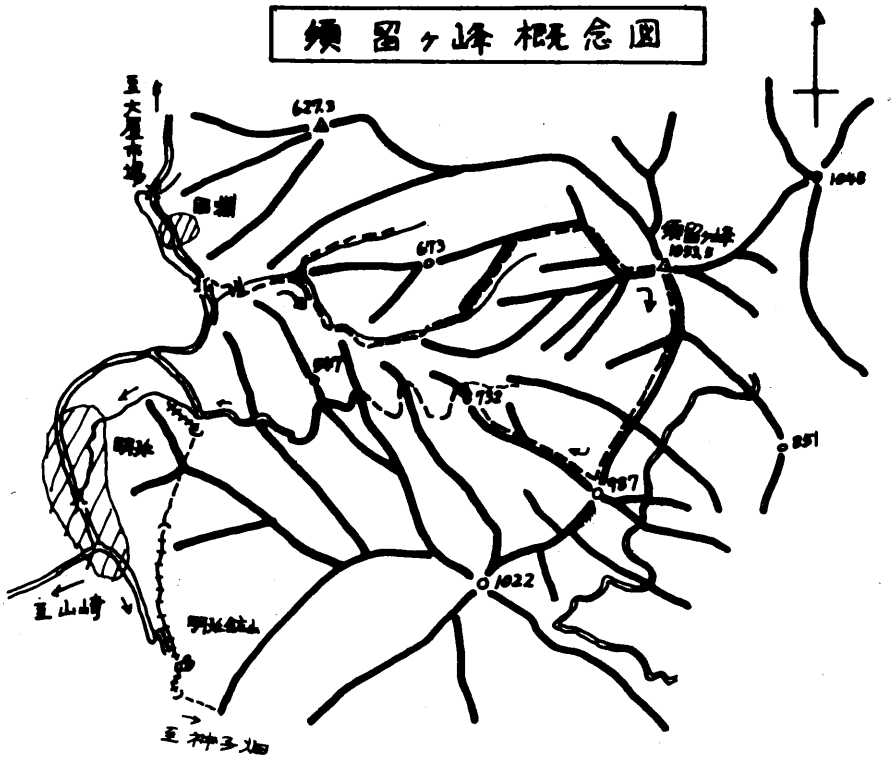
前週に続き，八鹿駅でステーションビバークをする。明延行の全但バスに乗り、終点手前の"田淵"で下車する。そのまゝ、バスの進行方向に進み、田淵の部落を抜け、橋の手前で須留ケ峰の西面にはいっている沢の右岸をたどる。さしずめ、ここが登山口か。2万5千分の1地形図に記載の破線図通りの径である。すぐに砂防堰堤が現れ、その手前で左岸に移る。右手の山側へあがっている良い径を2つばかり見送り、左岸沿いにどんどん進む。堰堤の上流で沢は二俣になっている。左俣へ渡る径もあるが，右俣を行く。丸木橋を右岸、左岸と繰度も渡る。コンター500m付近で径はなくなる。沢通し

にそのまま100m程進むと右岸に崖があり、その上手より踏跡らしきものが支尾根をあがっている。水流も細くなり、地図をみると、この先でルンゼ状になっている感じなので、この支尾根をたどることにする。踏跡はすぐなくなったが，雑木が密生していないので割合楽だ。頂上から南へ1022m独標に連なる尾根がみえる地点で一本たてる。天気が良すぎて藪漕ぎするには、少し暑い。主尾根の直下で右手からの水平径と出会う。この径は尾根を越え、右山腹をまいている。この地点から尾根上に境界の切開きがある。300mほど進むとこれもなくなり、松の大木が尾根上に単列をなしている。踏跡らしきものがあるのでよくみると、熊であろうか爪でかいた足跡である。50m程急登して直角に右折すると、ゆるやかな尾根となる。径はないが，落葉をかさこそと踏みながらの気持良い散歩を楽しむ。この付近から木の間越しに氷ノ山がみえる。コンター950mから笹が現れるが，せいぜい胸までなので歩き易い。難なく頂上手前のピークに達する。少し下った所に、針金製の錆びた罠をみつける。動物がかかるとかわいそうなので、ワナとして作用しないよう手で折っておく。鞍部から北側へまわりこむと登り易そうであるが、根曲り竹と対話を交すべく身丈は充分にある密竹の中を直登する。一登りで測量用櫓のある頂上に着く。櫓に登ると展望が開け、北西には残雪をまとった氷ノ山、その右には先週登った静川山、北には妙見山、南西には藤無山(点名：三本杉)、三久安山、阿含梨山、一ッ山、三室山、南には神子畑山、段ヶ峰。東には栗鹿山、婆々山、行者山、建屋山等兵庫の山のオンパレードである。いずれの山も既にその頂を踏んだ山で、色々な想い出が脳裡をかすめる。大阪の好山好会の頂上標識があり、笹に囲れた美しい頂上であるが、二等三角点の標石が傷んでいるのが残念である。（後刻、一円電車で一緒になったおばさんによると、30年前には須留ヶ峰西麓の田渕山という鉱山から頂上まで登山道があり、小学校の遠足でよく登った。しかし、最近は径もなくなり登る人もないとのこである。）

頂上から1022m独標にのびる南尾根に径があり、これをたどる。最初のピークを通過したあたりから、この径は東斜面の林道を目指しているようなので、これを辿ることを止め、南尾根を独標987mまで行く。この途中に「牛放牧中　立入禁止　日本土地山林(株)」の板が木に打ちつけてある。この独標から西側の支尾根上にある樅の大木を目指して下る。支尾根には大屋町境界石があり、右側斜面は、植林後数年といったところかまだ木が大きくなっていないので、須留ヶ峰頂上がよく見える。正面に藤無山の山塊を愛でながら下る。732m独標付近で右側に踏跡らしきものがあるのでそれに入ろう

かとそちらを伺うと、5m先から突然獣の威嚇の唸声がする。びっくりして10mほど反対側に駆け下り、落ちていた枯枝を掴んで身構える。しかし、何事もなかったかのように静寂さがあたりを支配しているだけである。豚に似た唸声なので、おそらく猪であろう。何もいないようにみえても動物達はそっと身を隠し、闖入者が通り過ぎるのを息をひそめて待っているのだろうか?

コンター650mでトラバース径があらわれたのでそれをたどる。すぐに沢があり、径はとぎれるが、すぐ現れる。支尾根の先に木材搬出跡をみて、次の沢で喉を潤し、径端のスミレの花を愛で、山鼻をまわると林道にとびだす。もう須留ヶ峰頂上は、手前のピークと重なってみえない。林道を下り、すぐ下に県道がみえる所で、明延鉱山のズリを捨てに来ているトロッコと出会う。運転手のおじさんに「神戸へ帰るなら一円電車で帰った方が早くて安いよ。」と勧められる。このおじさんが運転して帰るし、誰でも乗れるというので、利用させてもらうことにする。やっとほころび始めた桜の下を明延の町へ下って行き、登り返して明延鉱業所の所内から一円電車の客となる。



（注）一円電車：正式には、明延鉱業（株）の明延鉱山と神子畑選鉱所とを結ぶ明神電車のことで、鉱石運搬の目的で昭和4年にトンネルが堀られた。鉱石運搬の電車に客車も連結し、人員輸送も兼た。その運賃は、もとは一銭であったが戦後は一円となり、いまなおその運賃が続いており、「一円電車」と愛称されている。一般の乗車は禁止されている。

黒尾山（1024.7m），氷ノ山（1510.1m）

山本　泰彦

11月3日～4日，メンバー：山本，（玉岡氏他11名）

11月3日（曇）　神戸――姫路――山崎――曲里（9：10）――林道終点（10：10～10：30）――虚空蔵尊（11：50）――黒尾山（12：15～14：30）――牧場事務所（15：15～15：30）――小野への峠（16：00）――深山橋（16：50）――上小野（17：05）――戸倉

玉岡氏は南紀州の山の精通者で「山渓」に時々紹介記事を載せておられる。氏が会長をされたこともある新宮山の会が「南紀の山と谷」を刊行された時、その販売先として大阪の淀川文庫を僕が紹介したのが縁で、交際させていただいている。また、同氏は還暦を前にして黄蓮谷右俣の遡行や冬の常念岳に登られるなど現役顔負けの山行を続けておられる。本文は、御一行の黒尾山，氷ノ山登山に同行した時の記録である。

曲里で神姫バスを降り、西安積の集落を北へ抜け、お宮の前から東取部落へはいり、西へ林道をたどる。林道終点をそのまま20mほど行き、右へ小沢を渡り、杉林の中を電光形に登ると、潅木帯にはいる。この径は、黒尾山頂上から東へ派生している尾根を忠実に登っている。急登であるが、一頑張りすれば、岩庇の下に祭られている虚空蔵尊に着く。ここから笹のかぶった径を一登りで、測量櫓のある頂上へ着く。北にある建設省の無線中継所が目障りであるが、櫓に上ると、日名倉山、後山、東山、暁晴山等の山々が指呼にある。これも兵庫県最南の1,000mの貫禄であろうか。

無線中継所のフェンスに沿って左へまわると、しっかりした径があらわれる。これをたどると、すぐに西へ派生している尾根に乗る。最初の鞍部で右側の谷へ下り、右岸を行く。右から沢をあわせると、これを渡り、右岸を高捲くようになる。2回ほど左岸に渡るが、おおむね右岸沿いに下って行くと牧場の事務所へ出る。予約しておいた搾りたての牛乳をいただく。

事務所の前の林道を放牧場へ登って行くと、小野へ越す峠に出る。右岸沿いの径を下り、栃の大木が数本ある所で休憩する。小野川に架る深山橋で林道に出ると、上小野バス停は近い。

11月4日（曇のち雨）　戸倉――登山口（6：40）――三ノ丸（8：15～8：30）――氷ノ山（9：20～9：50）――ブナ平（10：25～10：55）――氷ノ山越（11：05～11：20）――地蔵堂（12：00～12：10）――布滝橋（12：30～13：00）――鉢伏バス停（13：10）――八鹿――姫路――神戸

戸倉から国道29号線を北進，堀で大幹線林道に入り、5kmほどで橋を渡ると、すぐ左へ別れる林道に入り、300m行くと登山口である。ここから地図（1/25,000）「戸倉峠」で1182mの標高点へ伸びている破線路通りの登山道に入る。まことにゆったりした径であり、のんびりした気分となる。径の両側の根曲り竹は、きれいに伐られており、歩き易い。数百年も経た大杉もあり、ブナの古木が太い枝を四方に張り、高く空をおおっている。

根曲竹が低くなると、三ノ丸頂上である。（以前は二ノ丸と称された独標1464mのこと。）ここで豊満な女性の姿体を連想させる氷ノ山と初めて対面する。その左に仏の尾、青ケ丸、扇ノ山を従え、右には妙見山が見え、左肩には千本杉がアクセントを添え、兵庫の盟主にふさわしい大観をみせている。天然杉を過ぎ、二ノ丸からゆるやかなスロープを登ると測量櫓のたつ頂上である。尼高ヒュッテの原色が目障りである。古生沼を往復し、氷ノ山越への径をとる。コシキ岩を右に捲き、ブナ平で昼食を摂っていると雨がパラパラ降りだす。

氷ノ山越のお地蔵さんとも別れ、どんどん福定目指して下る。岩のでている個所もあるが昔からの峠道なので歩き易い。加藤文太郎が寝たという地蔵堂で少憩する。冬の難所「小豆コロガシ」を過ぎると、左に布滝、右に不動滝の展望台があり、八木沢へ下り着く。ここから約10分で福定のバス停に着くと同時に雨も本降りとなった。

（注）本山行にはハナオの方も参加しておられ、ゆっくりしたペースで歩いている。一般には、約7割の所要時間で充分であろう。

植松山（俚称　小河内山）（1191.1m）

山本　泰彦

11月10日，メンバー；田中，山本

11月10日（雨）　神戸（前夜）——千種町岩野辺の林道終点（9:30）——小河内ノ滝（10:05～11:15）——町境尾根（11:00）——植松山最高点（12:00～12:15）——三角点ピーク（12:25～12:40）——登山道と出会う（13:15）——小河内ノ滝（13:25）——林道終点（13:55）——神戸

夜来の雨も小降りになったので、植松山でも登ろうかということになり、千種町岩野辺の小河部落で県道と別れ、林道を北へ向う。約2km走ると小河内谷左岸の林道終点に着く。地元の人と出会い、谷奥にある山名を伺うと、「小河内山」と教えてくれる。（1/25,000地図には植松山となっている。）

川を渡らず、左岸の山径に入る。3回丸木橋を渡ると、径は右岸山腹を高捲き、高度を稼ぐ。沢音からして滝があるのだろうか？　径がゆるくなって谷川に出会うと左岸に渡る。ここで一尺は充分にある魚影を数匹みる。釣人もここまではこないのだろうか。ここから100m先で「小河内ノ滝」の標識に従って左下へ踏跡をたどると滝壷に着く。木製の祠があり、明るい感じの二条の滝が垂直に落下している。この滝は2段になっており、ここからは下部の20m滝しかみえない。近くの3段ハングの露岩が趣きを添えている。

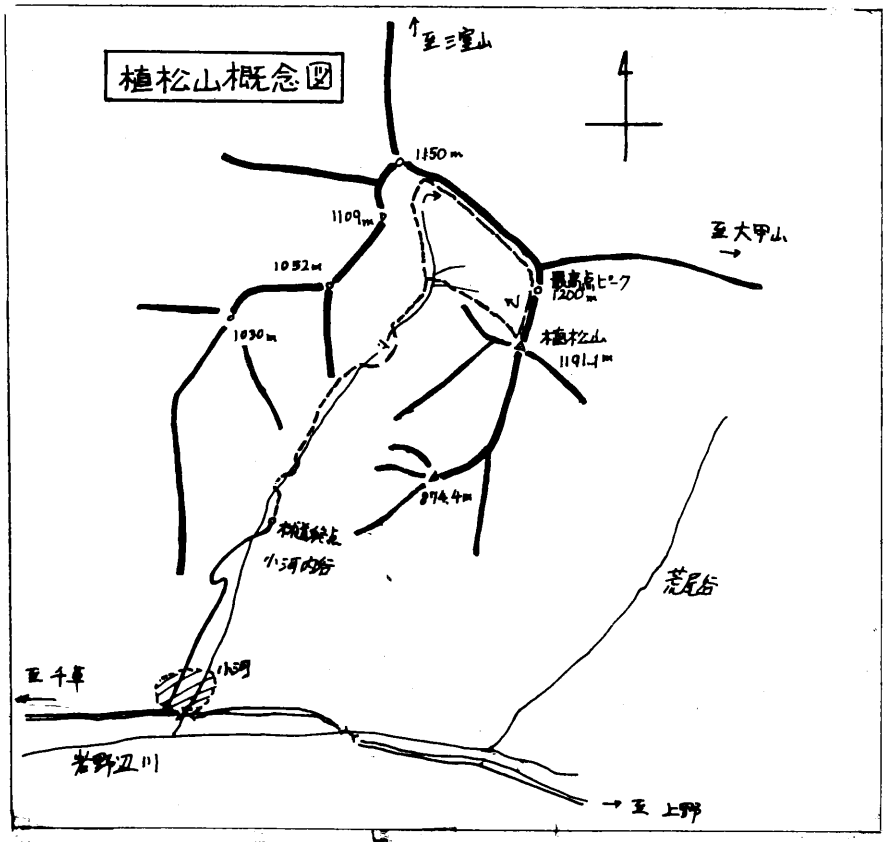
もとの径に戻り、滝の上を右岸に渡る。ここから谷は急に広け、高原状となる。少し行くと右手に沢を渡る踏跡があったが，そのまま真直ぐ行く。（この右手の径の方が頂上へは近い。）　傾斜のゆるい径をいくと，ほどなく消えてしまい，植林後数年といった感じの幼樹の中を適当に歩く。進行方向が真北を指している。少し北へ寄り過ぎたと思ったので、右寄り進み、千種町と波賀町との町界尾根にでる。この尾根は、切開きもなく、だだっ広く、しかも背丈を没する笹におおわれ、おまけに雲の中か、視界は50mときかない。歩いてきた地形と磁石と地図で、現在位置を割り出し、笹を漕いでいく。雨も本降りになってきた。最高点ピークとの鞍部付近で右手の桧の植林にはいる。植林のなかを少しいってから、胸までの笹を分けて一登りすると、最高点ピークに着く。尾根の東側は風雨が強い。ここで昼食を摂り、少し下って、登り返すと三角点ピークであった。

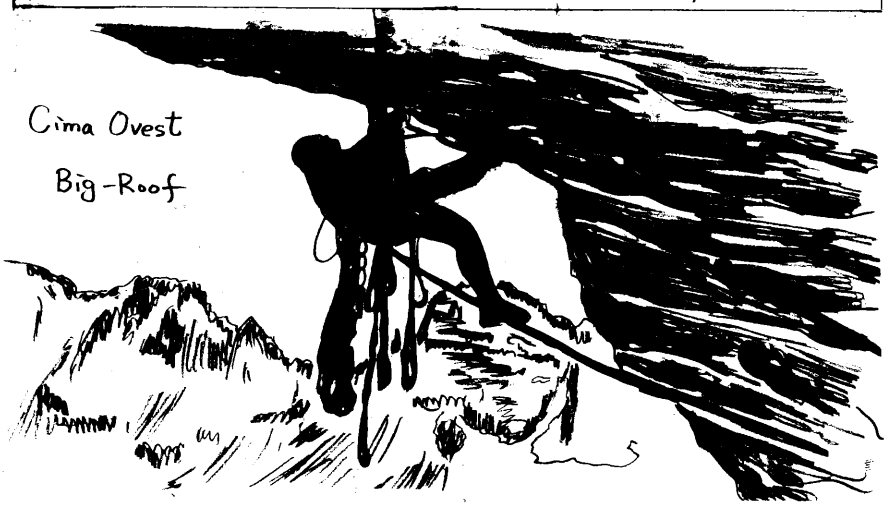
三角点の周囲だけ笹も低く、腰までくらいで，無傷の三等三角点が鎮座している。小河内谷側が桧林であるに対し，荒尾谷側は笹と低木であるので，

晴れていれば、眺望は得られるだろう。

北西方向に植林の中を遮二無二に下り、谷を渡ると、登りに歩いた径に出会う。それをたどり、濡れ鼠になって、林道終点に戻る。

再訪の機会があれば，小河内谷を忠実に遡行したいものである。





例会トピックス

5月27日　　中山惣河谷RCT

メンバー　○神田，幸内，矢木，迫田

バスで，スポーツ日本ゴルフ場前で下車。支流に入る．前日の雨で岩がぬれて，よくはまる。2～3個滝を越え，3段の滝を越えてしまうと，左岸に奥壁が見えた。戻ろうとするが，雨が本降りになってきたので，木陰で弁当を食いながら偵察．80 m とはいえ，スケールはなかなか大きい．

1時より，雨もやんだので，おりて登り出す。まずはAルート（ルンゼルート），1P目のチョックストーンがどうも乗越せないので，右側のボルトで吊り上げののち，左へ振り子トラバースをする。2P目，ツルツルの凹角は吊り上げで越し，あとは快適。最後のクラックも快適で頂上へ（2時30分）。幸内，矢木さんを30分ほど待つが，こないので迫田さんと左側のルンゼを下り，最後のピッチを懸垂で降りBルート（スラブルート）に取付く。逆層ではあるが，快適。高度感もあり，いい気持ち。3P目で，幸内，矢木さんといっしょになる。

後に中山を目指して登り，頂上手前で南に下る。ただし，自衛隊の演習地に入り込んだ為，もう少しで採石所の断崖に出るところであった。宝塚の珉珉で一杯ひっかける。

4月22日　　雪彦山RCT

メンバー　○神田，植原，星野，幸内，萩生，矢木，山本，広沢，大下，上原，小林，国沢

全員で地蔵の東稜ノーマルルートを行く。1P，2Pとも細かいスラブで，フリクション主体だ。4P目のチムニーは，入りこみすぎると苦しい。頂上フェースは，少し微妙なところはあるが楽しい。昼寝としゃれこむ。2時ごろから，地蔵の正面に取りつく。（他のメンバーは，大天井岳経由で下山．）星野，植原両氏は，右カンテルートをとる。ハーケンがあまり効いておらず，やばりとのこと。萩本さん，小林氏は，同窓会ルート。正ちゃん，神田君も同様。（ただし，最初は紅菱会ルートに入っていたが，かぶっていてやばいのでやめる。）1P目は，4級のフェースクライム。2P目はアブミのかけ替え，スラブ状クラックをフリーで，のち人工，人工からフリーになるところがいやらしい。3P目，左に取るべきところを右に取りすぎ迷う。

6時30分頃で，次第に暗くなる。星野氏にザイルを垂してもらって右カンテルートと合する。（左のボルト連打が，本当のルートの様だ。7時30分）。非常に悪いフリー，トップではよういかん。
駐車場についたのは，8時30分頃。みなさん，ごめんなさい！

5月20日　　比良山沢登り

メンバー　○星野，宮本，幸内，田中，山本，広沢，矢木

前夜21時30分阪急十三駅集合，22時03分の特急で京都へ。昨日．京都三条7時09分発梅ノ木行のバスに乗る（バス代¥590）．梅ノ木に9時着．バス停からしばらく歩いて，貫井谷の沢に入るとすぐに身仕度をする。9時30分いよいよ出発，せいぜいが2mにもならぬ小さな滝は20分程の間に，10以上もある。F_1（3m），F_2（3m）を抜けると堰堤が出現，左岸を巻く，F_3（4m）の右岸を抜けると，最初の出合である（9時55分）。F_4（4m）は一昨日の雨で沢の水量が多く，全員がシャワークライムを嫌ってすぐ右側の空のナメ滝を登る。F_5（3m），F_6（4m）このあたりから大きな岩がゴロゴロしだす。10時30分，2ッ目の出合に到着，5mぐらいのナメ滝となって両俣から落込んでいる様を眺めながら一息いれる．10時45分右俣と分れて，左俣を進む。F_7（5m）ナメ滝，次のF_8（4m）は，滑りやすいナメ滝で，オポジションで登る。1名滑落。F_9（3段40mのナメ滝），F_{10}（10mナメ滝）左右どちらからでも登れるが上部が悪く1名滑落，3名は左岸を高巻く。F_{11}（3段30m滑滝），F_{12}（10m）は全員が右岸を高巻く。F_{13}（60m滑滝）水量が多く最初の5m程左岸を高巻いて途中から取付く．2ヶ所ザイルを出す。F_{14}（20m滑滝）。F_{15}（20m滑滝）は直登組と高巻組に分れる．13時過ぎ，3段で70～80mもある滑滝F_{16}に到着。1段目は右を巻く，2段目と3段目は左岸を抜ける。F_{17}（2段20m）は，幸内氏トップで抜け，上からザイルを垂して，プルージックで登る。F_{18}（15m）左岸を抜ける。F_{19}（5m）の左岸を抜け次のF_{20}（20m）は右岸を高巻く。廻りにシャクナゲの群落が美くしく花を競っている。F_{21}（5m）左岸を抜ける。F_{22}（2段20mのリラメン滝）は左岸のシャクナゲの林の中を高巻き，再び沢に降ると一息入れる。時刻は3時。F_{23}（15m滑滝），F_{24}（5m滑滝）は右岸を，F_{25}（5m）は左岸を抜ける。F_{26}（10m）は宮本氏がトップで抜ける，出口のアンダーホールドで廻り込む所がいやらしく，セカンドで抜けた星野氏にザイルで確保してもらいプルージックで通過。F_{26}のすぐ上が両俣とも滑滝からなる3ッ目の出合で

ある。右俣を登路に小滝をいくつか越えて進むと流れは急に左に折れ，F27（4段45mの滑滝）が続いている。上部で右岸を高巻く。千番目の出合も右俣を進む。3段の小滝を過ぎた頃から水も少なくなり，ガレに変る。水が切れた所で時計を見ると16時30分それから20分程ブッシュの中を進むと，武奈のピークに着く，30分程して下山を始める。18時15分金糞峠，比良駅19時45分（比良＝高槻¥590）　　（文責　矢木）

9月23日～24日　　雲彦山不行岳北壁一般ルート（裏例会）

メンバー　神田，上原，山内

23日の日曜日，堡塁で登った後，正ちゃんの車で出発。山の話に花が咲く。PM 9：30に着き，酒盛り。星空が美しい。

24日，6：00に起き，6：40頃出発。高曇りで天気が心配だ。不行沢の取付きを見過し，スラブ滝をまき道を使ってチョックストンを越える。8：20取付き。正ちゃんトップ。山やん，僕と続く。1P目チムニーでぬれていて悪い。ピンは多く入っている。以後つるべ。

2P目，チムニー。ぬれているし，ハーケンもなく，スタンスも逆層だ。荷をおりて正ちゃんに持ってもらうことにする。ハーケンをたたき込むが，指を打ち目から火が出る。打ち込んだハーケンに根元からシュリンゲをからませ，祈るような気持ちで乗越そうとする。実際取付くとけっこうホールドや，スタンスがある。内に入りすぎないように気をつけながら，乗越し，出たところからバックアンドフットでずり上がる。

3P目，フェース。岩が脆い。

4P目，No.3チムニーの横のカンテ。細かくかぶってはいるが，ハーケンもあり快適。以後，北壁バンドをいく。（5P～7P）草つきで，踏跡らしきものがある。

8P目，チムニー。チムニーといっても，横のフェースを行ってもいい。山やんが，僕と正ちゃんのザックを持ってくれており，その中に梨が入っているのであるが……。バックアンドフットをするたびに，つぶれはせぬかとヒヤヒヤする。

コルに出て写真をとり，大天井岳へと向う。（かわいいリメッチェンがおった）。5mほどのフェースがあり，フィーフィを使って乗越す。大天井岳についたのは，PM 1：15。（所要時間　5Hr）

昼めしを食い，梨をかじり（無事だったのです），裸になって（上だけです）くつろぐ。やはり秋だ。風が爽やか。それに静かだ。ときたまハイカー

の「ヤーホー」の声に，ふと我に帰り，ゆずらゆしく思ったりする。
下降路をたどる。下に行くほどムシ暑く，汗が出る。テント場についてかたずけ，店に入りビール。その後，自動車で駐車場を出ようとしたとたん，ニコニコしたおばちゃんに止められ駐車料300円をせしめられる。ムムム---。6時頃までにはいるそうな。大失敗，雪彦に来てこんなに早く帰ることはめずらしいものね。
正ちゃんには悪いが，山やんと2人，ビールの酔いもまわってか，車の中で熟睡させて戴きました。

会員動静

おめでた

迫田哲郎さん　長男「龍之介」君誕生　9月17日生

内藤正司さん　長男「純　平」君誕生　11月12日生

退　会

長らくKAC会員として，常に会のトップに立って活躍してこられた三浦靖男君がこのほど都合で退会されました。

編集後記

月報アンケート結果

1．回収数　21人（42％）
回答ありがとうございました。今後の編集の参考にさせて戴きます。

2．回答結果

A　予算と発行回数の問題点、

(1)　月報の年間予算 10万円は？

a. 安い	11人	(52%)
b. 高い	1人	(5%)
c. 適当	6人	(29%)
その他	3人	(14%)

(2)　発行回数はどれくらいが適当か？

a. 1回	4人	(19%)
b. 2回	6人	(29%)
c. 3回以上	9人	(43%)
その他	2人	(9%)

(3)　名称について

（発行数に関係なく全数をTotalしました。）

会報	9	月報	3
年報	3	半年報	1
報告	1	Kアルペン	1
季報	3		

従来通り会報・月報の2段がまえがよいと思います。但し会報の希望者が最も多いので、これからは会報の発行に重点をおきたいと思います。

(4)　今後の月報作成方針（主として予算面，品質面）

a. 10万円以下でおさめる。	6人	(29%)
b. 現状維持（10万はオーバするかも?）	14人	(66%)
c 廃止	1人	(5%)

現状維持の方が多く，来年度の予算編成上の参考になると思います。因に作成費用は，概ねタイプ印刷の場合 2000円/1ページ（1344字），手書きの場合 1000円/1ページ（1156字）となり手書きにすればコスト的に58%程度になります。

(5) 月報に対する意見

① 年2回の会報にして今の月報より充実したものにしては!

② 年2回では少なすぎる。

③ 年1回必ず行動記録を出すことにより反省及び今後の方針も出ると思う。吾々に取って会員の動静が知れて懐しい。

④ 会報の発行が出来ないような会はむしろ解散した方がより。

⑤ 会員間のコミニケーション，山のガイド等に，それに個人山行では本人の記念になる。

⑥ 月1回が理想と思うが，年2回で内容を充実しては!

⑦ 経費節減のため印刷を落してより。写真を省いてより。

⑧ 年1回の年報にして，月1回ザラ紙1枚ぐらいの月報を出したら如何。

⑨ 2～3ヶ月に一度は発行してほしい。

⑩ 金額以外に編集の方は問題がないのか?

⑪ 一生の自分の本(記録)となるので今までのようにやってほしい。

⑫ 会員のお金は会員の為に使ってこそ意義がある。月報とか会報は新人会員の情報源でもある。内容は意義ある山行であれば，おのずからよいものが出来ると思う。

⑬ 基本的には会の全山行記録及び各会員の意見等を記載すべきである。量的には個々の記録の簡素化を計る。

編集後記

(Y.H & S.O)

上記のアンケート結果を要約すれば，回答された方々は現在の月報を内容的にさらに充実することを望まれ，かつ会報の発行を希望されているように思います。(会報はS40年8月，No.8号以来発行されていない)
思うに現在の月報は会報的性格が強いが，さりとて会報というにはいささか不十分であると感じられます。それは個人的意見ですが，会報には各号毎に1つのテーマ的内容が必要かと思いますが，今回発行の内容をみても，確かに山行内容はバラエティーに富んでいますが，会として取り組んだ内容のものは一つもなくバラバラであります。これは弁解する訳ではありませんが，月報係や企画係ましてや委員長の責任などでは決してないものと確信する。それは会員個人個人の問題とそれをまとめるリーダーシップの欠除にほかならないのではないか!
"手書きにして約6万円のコストダウン。出来栄えの悪さは容赦願います。"

神戸山岳会・会報　No. 9

昭和５４年１２月　発行

編集者　星野辰也・大下澄子

発行者　神戸山岳会

神戸市生田区中山手通１丁目１０５の９

（前田浩方）

印刷者　神戸市生田区北長狭通４丁目私学会館内

甲南出版社